シカゴで浮世絵を再発見する旅

～シカゴ美術館、クラレンス・バッキンガム、シカゴ万博の歴史巡り～

下川杏子

はじめに

私は大学の授業で浮世絵に興味を持ち、単純に本物の作品を多く見たいと思った。私が特に興味を持ったのが鈴木春信(1725?～1770 年)の作品であり、彼の作品がどこの美術館に所蔵されているか調べてみると、その多くは海外の美術館に所蔵されていた。中でも、所蔵先として特に目立ったのがシカゴ美術館であった。そこで私は、シカゴ美術館の浮世絵コレクションについて研究することにした。

シカゴ美術館(The Art Institute of Chicago)には、日本美術、特に浮世絵のコレクションが充実しており、その数・保存状態は世界トップクラスと言われている。シカゴ美術館にこれほどまでのコレクションを寄贈したのが、クラレンス・バッキンガム(Clarence Buckingham)という人物である。彼が日本美術に惹かれるきっかけとなったのが、1893 年に開催されたシカゴ万国博覧会であった。このシカゴ万博は、現在のシカゴの都市形成にも大きな影響を与えており、そこには日本との関係も見出せる。そこで私は、「シカゴ美術館の浮世絵コレクションのルーツを探る」とともに“異文化の中での浮世絵の評価”“シカゴ万博とシカゴの都市形成”について考察したい。

研究旅行日程(2008 年 9 月 5 日～9 月 10 日)

9 月 5 日	福岡発―シカゴ着
9 月 6 日	午前：シカゴ美術館(The Art Institute of Chicago)
	午後：ハロルド・ワシントン図書館(Harold Washington Library Center)
9 月 7 日	午前：フィールド博物館(The Field Museum)
	午後：科学産業博物館(The Museum of Science and Industry) 日本庭園(Osaka Garden)
9 月 8 日	午前：シカゴのフィールドワーク…シカゴの建築群見学
	午後：シカゴ美術館 ☆12:00~12:45　GALLERY　TALK「Japanese　prints」
9 月 9 日	シカゴ発
9 月 10 日	福岡着

まず、シカゴで訪れた場所について、その目的と学んだことをまとめる。

シカゴ美術館

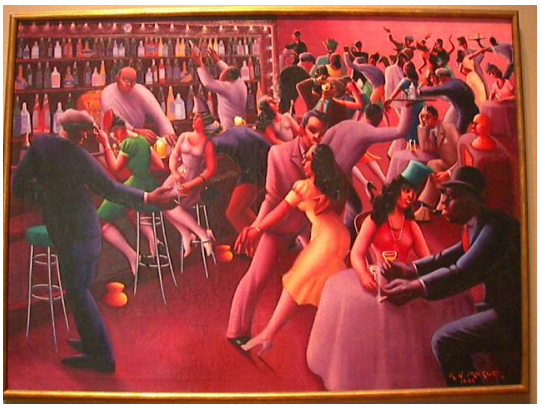
ここでは、シカゴ美術館が収蔵している世界中の多彩な美術品を鑑賞するとともに、その中での日本美術の存在感を感じることを目的とした。

まず、何と言っても、印象派のコレクションは圧巻であった。とにかく多く、見飽きることはないが、作品が果てしなくあるのではないかという気分になってくる。ゴッホや、モネ、ルノワール、スーラなど本当に有名な画家の作品が多く展示されている。しかも、思いのほか間近で鑑賞することができ、色彩や筆遣いなどに見惚れるばかりであった。

アメリカ美術もすばらしいものであった。私自身、普段あまりアメリカ美術というものに意識を持って接していなかったせいか、とても新鮮だった。色彩がはっきりとしていて、作品の中での影の存在を強く感じられた気がする。

日本美術のコーナーはというと、他の所と違ってとても厳格な雰囲気であった。展示されているものが浮世絵だったということもあり、照明や部屋の湿度・温度などがしっかりと管理されているのがわかった。今回の旅の一番の目的であると言っても過言ではない、“鈴木春信の作品を鑑賞する。”ということは、残念ながらできなかったが、今回の浮世絵の展示テーマが“Yokohama-e”であり、鎖国が行われていた時の日本人からみたアメリカ人を描いた浮世絵が鑑賞できたことはとても貴重だった。浮世絵は、12 週間の展示を終えると、最低 5 年は展示されることがない。このことを考えると、浮世絵の中でも知らなかった分野の作品を見られたことはとてもラッキーである。しかも、シカゴ滞在期間に、たまたまシカゴ美術館の学芸員によるギャラリートーク(Yokohama-e について)を聞くことができた。作品のことから浮世絵の制作方法まで、もちろん全て英語での説明だったわけだが、どのような単語を使って浮世絵の説明をするのかはとても勉強になった。（ちなみに、肉筆画は“hand-colored prints”）

・シカゴ美術館の外観



・『*Nightlife*』

ハロルド・ワシントン図書館

クラレンス・バッキンガムやシカゴ万博についての資料が日本にはあまりないため、これらの資料を入手するために足を運んだ。バッキンガムについてとシカゴ美術館の日本美術コレクションについての資料をたくさん手に入れることができた。浮世絵の説明を英語でどのように表現すればいいかも、実際の資料から学べたのでしっかりと自分のものにしていきたい。また、海外の図書館での情報収集やその空間ですこしでも勉強できたことは、とても貴重なものであった。

・館内

・外観

科学産業博物館

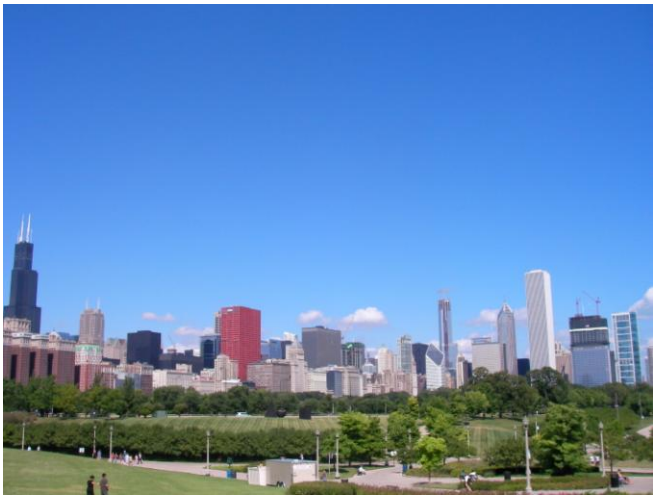
科学産業博物館はシカゴ万博当時のままの建物であり、建物を見学に行った。今から 100 年以上も前の建物とは思えないほど重厚で、綺麗であった。科学産業博物館の敷地内には、シカゴ万博当時に日本が寄贈した、シカゴ市内唯一の日本庭園がある。1894 年のシカゴ大火で、その大部分を焼失してしまったが、シカゴ市と大阪市が姉妹都市を提携した記念に、大阪市が修復を行い、1993 年から“大阪ガーデン”として親しまれている。実際に大阪ガーデンを訪れてみると、何の違和感もなくシカゴの町や人々に馴染んでいる感じがとてもうらやましく感じた。

・科学産業博物館外観

・大阪ガーデン

フィールド博物館・シカゴの建築群

シカゴの町は、町全体が建築物のギャラリーのようであり“近代建築の博物館”とも呼ばれている。新旧建築の混在したシカゴの町には、超高層ビルもあれば 100 年以上前に建てられた建物も存在し、とても迫力があり少し歩くだけでも、吸収するものは大きい。ビジネスの町としても知られるシカゴだが、これらの建築物の間には、ピカソやミロ、カルダー、シャガール、デュビュッフェ作のモニュメントも点在しており、その都市形成における計画性の高さがうかがえる。また、町には大きな公園や世界でも有数の大きさを誇る噴水も存在する。この噴水はバッキンガム噴水と呼ばれ、先に述べているクラレンス・バッキンガムを記念して造られたものである。このように、町の都市形成と芸術が深く結び付いているシカゴには、博物館も多く存在し、市民の生活環境をより充実したものとしている印象を持った。都市形成においても、やはり、シカゴ万博が重要な転機となっているようであり、そこには日本の宮大工の技術がシカゴの建築家たちに大きな影響を与えたという事実もあることから、シカゴと日本との関係性にもさらに興味を持った。



・シカゴの建築群

・カルダー『フラミンゴ』

シカゴ美術館・浮世絵コレクションとクラレンス・バッキンガム

シカゴ美術館は、メトロポリタン美術館、ボストン美術館と並ぶアメリカ３大美術館のひとつである。印象派と２０世紀アメリカ美術のコレクションで特に有名であり、１０部門３０万点以上の収蔵品から成るコレクションはとても質が高く、見ごたえのあるものである。この莫大なコレクションの中の約１万点は浮世絵であり、紙、印刷ともに保存状態が大変良く、世界有数の浮世絵コレクションと言われている。なぜ、シカゴ美術館にはこれほど多くの浮世絵が収蔵されているのだろうか。

シカゴ美術館の浮世絵コレクションのほとんどは、クラレンス・バッキンガム(？～1913年)が収集し寄贈したものである。彼が本格的に浮世絵の収集を始めるきっかけとなったの

は、1893 年に開催されたシカゴ万国博覧会であった。当時のシカゴはフランスに大きな影響を受けており、シカゴの富豪たちはしばしばパリに渡り、印象派の画家の絵画を積極的に買い入れていた。これらの収集はのちのシカゴ美術館の基礎となっているのだが、同時に、世界のどこよりも先に、浮世絵を理解し賞賛していたのがフランスであった点から、印象派の絵画と浮世絵の多くがシカゴに集まっていることに深いつながりを感じずにはいられない。

シカゴ万博でバッキンガムと浮世絵を巡り合わせたものは、会場内に建てられた平安京の平等院鳳凰堂のパビリオンであった。ヨーロッパの万博を模範としたこの万博には、世界各国から建物、大噴水、記念彫刻碑などの作品が出品されており、日本が出品したこのパビリオンは他国の作品に比べて質素であったが、この館内に展示されていた浮世絵がバッキンガムの中に強く印象に残ったようだ。ここから、彼の浮世絵収集は本格化した。

彼の名が広く知られるようになったのは、1905 年(明治 38 年)にシカゴで行われた鈴木春信展からである。当時バッキンガムの出品した 26 点の春信の作品は、現在 260 点を超えるシカゴ美術館の春信コレクションの中でも名品に数えられるものばかりであった。彼が初めから春信の作品を好んでいたことは、この点からも明らかであろう。

また、1908 年(明治 41 年)のシカゴ美術館浮世絵展でも、バッキンガムのコレクションの大きさがうかがえる。例えば、94 点の春信の作品中 24 点が彼のコレクションからの出品であり、鳥居清長(1752～1815 年)は 39 点のうち四分の一強、喜多川歌麿(1753?～1806 年)は三分の一以上がバッキンガムの出品であった。しかし、葛飾北斎(1760～1849 年)は 49 点中わずか 5 点、歌川広重(1797～1858 年)にいたっては、93 点中 1 点も出品していない。このことからわかるように、バッキンガムは初期の浮世絵を好み、風景よりも人物を描いた作品を好んで収集していたようだ。

1913 年(大正 2 年)にバッキンガムが没してからは、彼の約 1400 点におよぶコレクションは 2 人の妹達に遺贈された。そして、1925 年(大正 14 年)にシカゴ美術館に寄贈されたのである。私的なコレクションから、公的なコレクションとなった浮世絵コレクションは、あらゆる分野を代表する完全なものであることが求められた。そのため、あまり収集されていなかった写楽(1794 年 5 月から翌年 1 月まで活躍。)の作品や、風景画などが買い入れられた。こうして、現在のシカゴ美術館浮世絵コレクションが成立したのである。

最後に

実際にシカゴへ行き、多くの経験を通して学んだことは文字にすることができないくらい多い。そのような中で私が一番強く印象に残っていることは、想像以上に、日本がありのまま受け入れられているということだ。美術館に展示されている日本の芸術品は、他の国のものとも引けをとっていないし、博物館には日本の履物の歴史を展示しているコーナーもあった。町には、見慣れたコンビニもあふれているし、何と言っても、大阪ガーデンの存在感は忘れられない。浮世絵が初めて芸術品として高く評価されたのが、海外であっ

たように、私自身も、日本の文化を海外で目の当たりにし、その素晴らしさに初めて気づけたような気がする。

今回の旅行を通して、国外における日本文化にますます興味を持つようになった。この経験を無駄にしないように、しっかりと今後につなげていきたい。本当に小心者の私が、一人でシカゴを旅できたことは奇跡である。ある本で、“怖いからこそ勇気がでる。”という一節があったが、シカゴでの経験を通して本当にその通りだと思うので、これからも不安や恐怖心を力に変えて、積極的に多くのことを吸収していきたい。

このような気持ちが芽生えるきっかけを与えて下さったことに、本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。

・ミシガン湖

○参考文献○

『The Clarence Buckingham Fountain in Chicago’s Grant Park』Chicago Park District 3
『The Clarence Buckingham collection of Japanese prints』 Art Institute of Chicago
『シカゴ美術館浮世絵名品展』Art Institute of Chicago
『浮世絵の歴史』監修＝小林忠　美術出版社

○研究旅行要旨○

シカゴ美術館(The Art Institute of Chicago)には、日本美術、特に浮世絵のコレクション

〇研究旅行要旨〇

シカゴ美術館(The Art Institute of Chicago)には、日本美術、特に浮世絵のコレクション

が充実しており、その数・保存状態は世界トップクラスと言われている。シカゴ美術館にこれほどまでのコレクションを寄贈したのがクラレンス・バッキンガム(Clarence Buckingham)という人物であり、彼が日本美術に惹かれたきっかけとなったのが 1893 年に開催されたシカゴ万国博覧会であった。このシカゴ万博は、現在のシカゴの都市計画にも大きな影響を与えており、そこには日本との関係も見出せる。今回の旅行は、「シカゴ美術館の浮世絵コレクションのルーツを探る」とともに“異文化の中での浮世絵の評価”“シカゴ万博とシカゴの都市形成”について考察するために計画した。

また、シカゴ美術館の浮世絵コレクションのルーツを探るための重要な人物である、クラレンス・バッキンガムについての資料は、日本にはほとんどないため、これらの資料を収集するためにも、現地へ向かった。